山形市の校歌に見る地域景観

Landscape in Yamagata City through School Songs

髙野　公男
TAKANO Kimio

The Purpose of this paper is to study the enviroment of Yamagata City by analyzing school songs of 53 primary and secondary schools in Yamagata City. Feature of the natural landskcape such as mountains, rivers, the sky, fields, trees and flowers are ofen recorded in the songs. Mountains are mentioned most often. Mountain Zao and Mountain Gassan are both favorites of the people of Yamagata. Rivers have not appeared in the songs since 1965, because it seems water pollution has made rivers unappealing to the people.

1．はじめに

わが国の人々の多くは、小学生時代から高校生時代にかけて、地域の風景との結びつきの中で校歌に親しんできた経験を持っている。学校を離れ社会にでてからも、改めて校歌に触れると、そこに謳われた景観に思い出をよみがえらせ、身の回りの景観に対する認識を新たにする機会を持つことが出来る。

校歌は「学校で建学の理想をうたい、校風を発揚するために制定した歌」（広辞苑）である。わが国の小、中、高等学校では、その殆どが独自に制定した校歌を持っているが、山形市内の小中学校でも、それぞれ特色ある校歌が制定されている。

ところで、近年の景観問題の高まりとともに、校歌を素材に地域景観を分析する試みがはじめられている。校歌は一般に校風や教育理念を挙げ、同時に郷土の歴史風土を謳い挙げる共通のスタイルを持つ。このために、校歌に謳われている景観は、地域特性として共有されている景観像を反映したものになっている。校歌と景観に関する既往の研究には、北原理雄らの研究があるが、これらの研究では、校歌を媒体にした景観計画や環境教育の可能性が提示されている。

ここでは、これらの成果を援用しつつ、山形市の景観構造の分析を試みたい。校歌に謳われている景観を分析することは、住民のイメージの中に形成されている景観構造を読みとろうとする試みである。現実の景観の様々な態様との照合分析等を行うことにより、景

観整備計画のテーマ設定や推進策の手がかりを得ることが可能となろう[*1]。

2．山形市の学校と校歌

対象とした校歌は、山形市教育委員会から資料提供を受けた、山形市立の小学校36校、公立（山大付属）小学校１校、市立中学15校、市立高校1校、計53校の校歌である。山形市は村山盆地に立地し、城下町として古い歴史を持つ人口25万の都市である。

(1) 制定年次と立地類型

校歌の制定年次は、戦前４校、昭和20年代27校、30年代13校、40年代以降９校である。最も古い年次は高瀬小の昭和５年で、第三小昭和10年、千歳小13年、本沢小14年、新しいものは東小56年、宮浦小57年、第十中58年、桜田小平成４年であり、大半の校歌（74%）は昭和20～30年代に制定されている[*2]。

歌詞の傾向は戦前から昭和20年代にかけては格調高い文語体、30年代以降は平易な口語体へ移行している。そのほか校歌の形式、内容については、いくつかの事項を除けば大きな変化はない。

分析の必要性から、学校区及び校舎の立地を考慮して、立地類型を「市街地」、「田園」、「山麓Ｅ」（東山麓）、「山麓W」（西山麓）に設定した。市街地校と田園・山麓校との校数比は23：30である（表１、図１参照）。

(2) 作詞者・作曲者

対象とした校歌53校において作詞者は29人（１人平均1.8校）である。山形市では１人で13校を制作している真壁仁をはじめ、以下のように作詞者が複数校を制作しているケースが多い（[　]の中は作品が出現する期間）。

・真壁　仁　　13校　[昭和10年～57年]
・芳賀　秀次郎　９校　[昭和30年～56年]
・結城　哀草果　７校　[昭和14年～33年]
・完戸　一郎　　３校　[昭和25年～52年]
・神保　光太郎　３校　[昭和29年～38年]
（他に１校18人、計23人）

山形市の校歌は、古い時期より少数の作詞者による寡占状況にあり、53校のうちの35校（66%）を制作している上記の５人が山形市の「校歌文芸」の基調をつくっているといってよい。ちなみに、真壁仁は山形が生んだ著名な農民詩人（山形市宮町・1907～1984）、結城哀草果は「山麓」の歌誌を創刊主宰した斎藤茂吉の高弟(1895～1974)、芳賀秀次郎は長井高校校長をつとめたアララギ派の詩人（白鷹町・1915～1993）、神保光太郎は京大出の独文学者・詩人（山形市薬師町・1905～1990）でいずれも郷土出身の詩人である（括弧内の地名は出身地）。他の作詞者は、土地にゆかりのある詩人、地域の名士、校長などの教職員が多いようである。

作曲者についても触れておくと、作詞者ほどではないが、以下のように類似の傾向を示している。

・福井　文彦　　６校　[昭和10年～35年]
・海峰　義美　　６校　[昭和25年～42年]
・斉藤　次郎　　４校　[昭和29年～56年]
・丸子　喜一　　４校　[昭和26年～52年]
・藤澤　孚　　３校　[昭和47年～57年]
（他に２校６人、１校18人、計29人）

表１　校歌の制定年代と地立類型

		小学校	中学校	高等学校	計
立地類型	市街地	16	6	1	23
	田園	6	3	—	9
	山麓	15	6	—	21
制定年代	戦前	4	—	—	4
	昭和20年代	17	9	1	27
	昭和30年代	10	3	—	13
	昭和40年代～	6	3	—	9
計		37	15	1	53

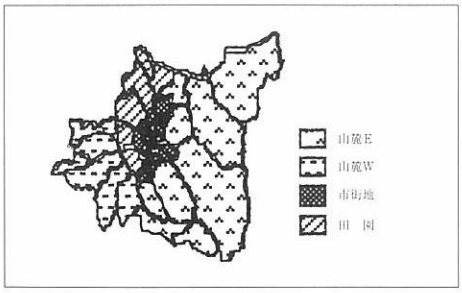

図１　学校区と立地類型

福井文彦は「蔵王に寄す」の作品がある作曲家（宮城教育大教授・1909～1976）、海峰義美は東北の小学校管楽器教育に功績のある作曲家（郡山女子大教授・天童市・1905～）、斉藤次郎は県音楽教育界を育てた教育者（山形大名誉教授・1907～1991）で、いずれも山形や東北にゆかりのある作曲家である。

他に著名な作家として草野心平（市立山商・作詞）、浜田広介（蔵王第一小・作詞）、弘田龍太郎（第五小・作曲）の名も見られている[1)]。

3．校歌に出現する景観要素と景観構造

(1) 校歌の景観描写の構造

景観構造の分析に先立ち、いくつかの代表的な校歌の歌詞に触れてみよう。立地類型に応じ、制定年代が共通の「第一小」（市街）、「大郷小」（田園）、「滝山小」（山麓）の３校を取り上げた。

a．ケース１・市街地校

（市立第一小学校・昭和25年制定）

まず、都心に立地する第一小では、以下の歌詞となっている。

小鳥は風に　舞いうたう　この世の朝の
さわやかさ
そそぐ光を　身に浴び　楽しい想い　花と咲く
うたおう　心の故郷を　山形第一小学校

千歳の松　若枝は　日ごとに伸びる　すこやかに
青い理想の　空目指し　すくすく育て　身もたまも
うたおう　心の故郷を　山形第一小学校

豊かに清く　そびえ立つ　月山の雲　仰ぐとき
高くあこがれ　舞い上がり　静かな力　湧いてくる
うたおう　心の故郷を　山形第一小学校

傍点の部分は景観要素である。一般に校歌の構造として（例外もあるが）、その短い歌詞の中に、近景・中景・遠景の３つの位相の空間がイメージ描写の舞台として設定されている。そしてその舞台の中心に学びや（学校）や、そこで健やかに育つ子供たちの姿があり、景観要素を媒体にしながら教育の理想が謳われ、郷土の風景や誇りが賛美されている。

第一小の場合、近景に「風に舞いうたう小鳥」、中景に「千歳（山の松）」、遠景に「雲をいただいた月山」が描写されている。このあたりでのシンボルとなる山は、月山なのであろうか。「舞いうたう小鳥」は市街地の空を連想させ、甍が連なる都心校のイメージを彷彿させる。昭和25年当時は都心でもみどりが多かったのであろう。

b．ケース２・田園校

（市立大郷小学校・昭和25年制定）

次に、市の北部、水田地域に立地する大郷小を取り上げると、以下の歌詞となっている。

広々と続くたんぼに　川端のやなぎの若芽
そよ風にすくすくのびる　教室の窓も明るく
ひらいてる
なかよし　こよしだ　元気でいこう

あたたかい光あふれた　グランドにみんな集まれ
月山はいつも見てるよ　いきいきと働くまちに
生いたって
強いからだだ　はげんでいこう

たゆみない学びの道に　朗らかな心をあわせ
おこそうよ
ふるさとのまち　城あとのみどりの松に風かおり
もえる希望だ　進んでいこう

「広々と続くたんぼに　川端のやなぎの若芽……」と大郷小では、水郷を思わせるおおらかな田園地域の風景が描写されている。「小鳥は空に……」の第一小の市街地のイメージと比べて対照的である。大郷小の場合、

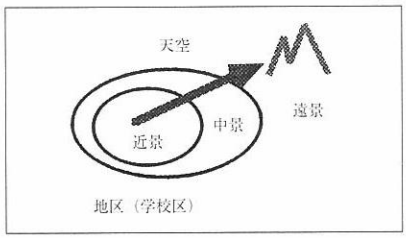

図２　校歌の景観描写の構造

近景として「やなぎ、教室の窓、グランド」。おそらく「川端」の川は、校舎の南側を流れる「逆川」のことであろう。中景は「広々と続く田圃」と須川に続く「逆川」である。遠景として「月山」が鮮やかである。「城あとのみどりの松」の「城あと」は、現在校地となっている中野城址のことと思われる。

c．ケース３・山麓校

（市立滝山小学校・昭和25年制定）

東南部山麓地域に立地する滝山小の歌詞は以下の通りである。

みどりの松の　千歳山　流れも清く　こころすむ
龍山川の　そのほとり　希望にあける　滝山校

やさしい花の　咲く窓べ　みんなすなおに
元気よく
伸びゆくものの　よろこびに　あふれて学ぶ
たのしさよ

雲わけそそる　龍山の　けだかいすがた　仰ぎつつ
真理の道の　遠くとも　もとめてはげむ　滝山校

近景に「やさしい花が咲く校舎の窓辺」、中景には「みどりの松の千歳山」及び「流れの清い竜山川」、遠景には「雲をわけてそそり立つ龍山」が描写されている。近・中・遠の描写のバランスがよいのは、起伏があり景観要素が豊富な山麓地域の特性を反映したものといえる。景観記述性に優れ、山や川が身近に迫ってくるように山麓の風景がいきいきと描かれている。

以上の３例を見ると、校歌の景観記述には地域性や場所性がよく現れている。これらの校歌を通して、その歌詞が作られた当時の原風景をたどることが出来よう。

⑵　景観要素の出現頻度と全般的傾向

歌詞の中に出現する景観要素を抽出し、18のカテゴリーに分けて整理した。出現頻度が高いカテゴリーは、山が53校のうち50校（校数率は94％）、校舎・地域46校（79％）、樹花36校（68％）、風26校（49％）、川・水辺25校（47％）、空23校（43％）、田野、光、それぞれ16校（30％）である。以下、太陽、雲14校（26％）、雪10校（19％）、丘８校（15％）、動物８校（15％）、歴史６校（11％）、月・星、虹５校（９％）と続き、その他が20校（38％）となっている（表２参照）。

年代別の傾向を見ると、山の出現頻度が90～100％とコンスタントなのに対して、川の頻度は昭和40年代以降がゼロを示していることが顕著な変化といえる。景観要素（アイテム）の具体的内容およびその出現頻度は別表１（景観要素抽出一覧表）に示すとおりである。例えば山の場合、蔵王、月山などのアイテムは17であり、アイテム総数66、出現率125％となっている。

景観要素の出現頻度を概観すると、山形市の校歌の特徴として、以下のことが指摘される。

①　山、川・水辺、樹花等、自然を謳った歌詞が多い。
②　その中でも山は殆どの学校で謳われており、山が景観の支配的要素となっている。
③　山に関連して空、雲、太陽、光など、天空や気象を謳い込んだ歌詞が多い。
④　風を謳い込んだ歌詞が多い。
⑤　都市のイメージを彷彿させる詞は殆どでてこない。
⑥　歴史を感じさせる要素の出現は少ない。
⑦　建造物は校舎・学びや・窓がシンボリックに扱われている。
⑧　山・川・丘・田野・樹花・雪・虹のカテゴリー

表２　校歌に歌われている景観要素

年代	学校数	山	川・水	丘	田野	樹花	動物	空	太陽	光	雲	月星	虹	雪	風	校舎地域	歴史	その他
戦前	4	4	2	—	3	3	1	1	1	1	1	—	—	—	—	3	1	2
昭和20年代	27	24	16	6	4	15	5	8	6	9	9	3	1	7	11	24	3	8
昭和30年代	13	13	7	2	5	10	1	7	5	4	3	2	3	1	9	11	2	4
昭和40年～	9	9	—	—	4	8	1	6	2	2	1	—	1	2	6	8	—	6
小計	53	50	25	8	16	36	8	23	14	16	14	5	5	9	26	46	6	20

に地域性や場所性が現れている。

山形市の校歌は全般的に、固有名詞の景観要素が豊富であり、このため、各地域の景観記述は内容も具体的で鮮明である。ただ、観念的イメージだけで教育の理想をうたい、郷土の景観を取り上げていない校歌も数校ある。

(3) 山の風景

校歌に現れる山は、盆地をめぐる山なみ、奥羽山脈、遠景の山・中景の山、近景の山とバラエティに富んでいる。山形市は四方八方、ぜいたくと言えるほど大小の山々に恵まれているので、それぞれの地区のシンボルとなる山はどの山なのか、作詞者でなくともその山選びに迷うところである（表３参照）。

ａ．蔵王連山【蔵王・龍山・雁戸山】

多くの文芸作品にもうたわれている蔵王は、山形の人々にとってシンボルの山、魂の山、心の故郷である。このため出現頻度もやはり蔵王が一番で20校と群を抜いている。龍山や雁戸山も蔵王連山を構成する山であるが、これらを「蔵王」に加えると、頻度は32校、出現率は60％となる。

蔵王の出現校は蔵王山麓の南東部から須川をはさんだ対岸の北西部にかけて広く分布している。その分布状況および歌詞の内容を分析して見ると、校歌に出現する蔵王の描写内容は、心象風景や観念としてのイメージではなく、それぞれの地域から見える実際の眺望の良し悪しに大きく左右されている。すなわち、よく見える場所ほど密度の濃い景観描写となっている。例えば須川の対岸から蔵王連山の容姿を正面に眺望できる第八中では、蔵王は次のように、かなり具体的に、また積極的に謳いこまれている。

表３　山の出現頻度

蔵王	20	葉山	2	城山	1
月山	9	宝珠山	2	色ずく山	1
龍山	8	大岡山	2	あずまね	1
千歳山	5	奥羽山脈	2	高い	1
雁戸山	4	めぐる山	2	火の山	1
白鷹山	3	盃山	1	緑の山	1

写真１　龍山・雁戸山など蔵王連峰の山なみ

「みちのくの　夜明けの空に　そびえ立つ
　火の山　蔵王　その山の強き力よ……」

何か蔵王が眼前に迫ってくるような迫力が感じられる。ところが、市域中央部以北になると、

「蔵王の山は朝を呼び　月のお山は明日を
　告ぐ……」（明治小）

「蔵王はるかに　学びの夜明け……」（出羽小）

「蔵王の高嶺東に　月読みの山西にみつ……」
（千歳小）

……と、蔵王イメージは遠景化し、描写も点景的であっさりしたものとなる。このあたりはからは蔵王は南に向かって左手奥に見える。やはり正面性の高い八中エリアの方がビジビリティが高く、人々に与える景観インパクトは強い。またこの市北のエリアでは、シンボルの山として校歌の中で蔵王と月山とが競合、あるいは共存しているのが興味深い。

これらのことから、山が景観的に支配する圏域があるとすれば、蔵王については、市北西部から馬見ケ崎川以南が蔵王圏ということが出来よう。馬見ケ崎川以東に出現校が１校（千歳小）しか見られないていないのは、それ以外の地域では、蔵王が位置的に視認出来ないこと、川を隔てて別の山系となっていること、身近にシンボルとなる山があることなどのためと考えられる（図３ｂ参照）。

ところで、蔵王はランドマークとしてわかりにくい山である。まず、蔵王山という名の山はないこと、山形市の市街地は蔵王の西山麓・扇状地に位置するため、市街地からその山なみの全容を望むことは出来ないこ

と、見えるのは前山の龍山・雁戸の連山で、主峰というべき熊野岳（1,841m）や刈田岳、地蔵山はその背後に隠れてしまっている等がその理由である。しかし、この主峰が見えないことや、群雄割拠する連山の複雑な容姿がかえって蔵王の持つ荘重なイメージを奥深くしているのかもしれない*3。

この蔵王の西山麓側では、龍山がランドマークとなる。龍山は「雲わけそそる龍山の……」（滝山小）と地域のシンボルの山として謳われている。他に7校、龍山圏というべき山麓8校が龍山を力強く謳っている。

雁戸山は特異な見え方をする山である。雁戸山はその山麓校の東沢小・第一中だけでなく、中心市街地のいくつかの校区をスキップして西側の金井小・第十小の校歌にも出現している。雁戸は東沢の奥まったところに位置し、前山に遮られているので、その容姿は山形市内の限られたエリアからしか見えない。この雁戸山とＪＲ山形駅を結ぶ延長線上の比較的狭い範囲が、「雁戸ライン」ともいうべき頂が顔をのぞかす雁戸山の容姿が印象的に見える範囲なのである。

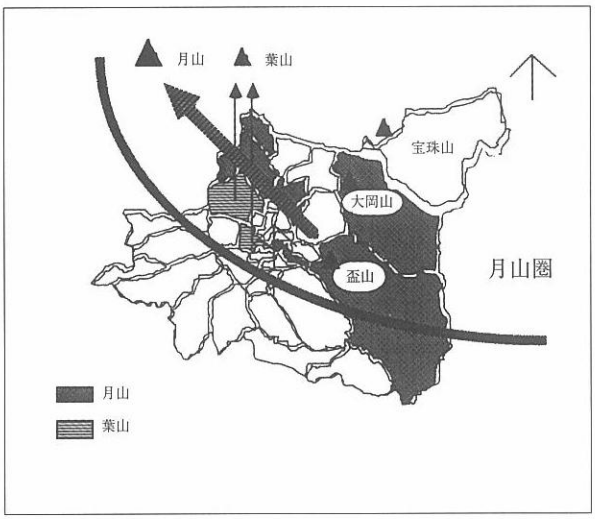

図３ａ　校歌に出現する山

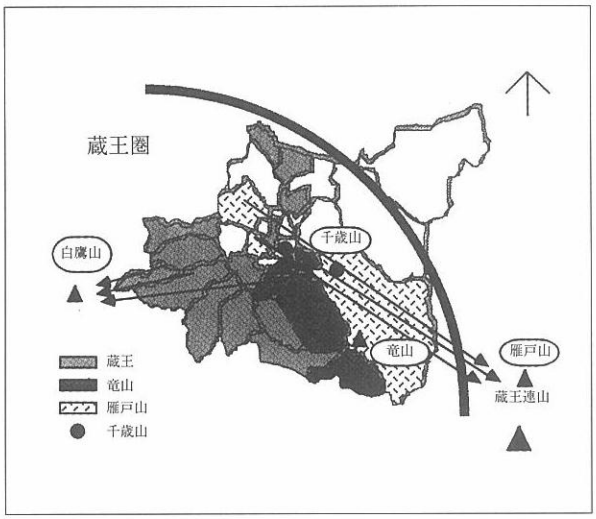

図３ｂ　校歌に出現する山

ｂ．遠く仰ぐ山【月山・葉山】

もう１つの霊峰である月山は、山形市内からその女性的でたおやかな容姿を遠望できる山である。出現校は中央部から北部にかけて分布している（９校）。その東隣に端正なスカイラインをあらわす葉山も、シンボルの山としてこの地区から２校（金井小・第十小）出現している。このあたりのエリアは北に月山・葉山の容姿が美しく、また東に雁戸山も印象的に見える地区である。月山は校歌では天空の「月」のイメージと重ねて併せて表現されているケースが多い。市中央部及び馬見ケ崎川以北が月山・葉山圏のようである（図３ａ参照）。

ｃ．身近なシンボルの山

【千歳山・白鷹山・大岡山・宝珠山・盃山・城山】

中景の山として千歳山（５）・白鷹山（３）・大岡山（２）・宝珠山（２）・盃山（２）が謳われている。地区のシンボルとして、いずれも容姿に特徴があり、イメージアビリティの高い山である。

千歳山の出現頻度が高いのは、円錐状の容姿と千歳の松で古くから親しまれているランドマーク（景勝地）であること、市街地に近接し学校密度が高いことなどの理由によろう。白鷹山はその山麓校である双葉小・西山形小で謳われているが、反対側の東山麓に位置する桜田小の校歌にも出現する。この地域から見る白鷹山は、中景の山というよりもはや遠景の山である。このあたりから見える山で最も印象的な山が、その特異な頂を備えた山容の虚空蔵山という異称をもつ白鷹山ということなのであろう。高瀬地区の大岡山、山寺地区の宝珠山、鈴川地区の盃山、本沢地区の城山（長谷堂城城址）が、それぞれの地区のシンボルの山、故郷の山として謳い込まれている。いずれも史跡や社のあ

る歴史的ランドマークである[2)]。

(4) 天空・気象

壮大なドラマを織りなす天体の運行や、変幻自在に変化する気象の様相を示す太陽、光、星、空、雲、虹などの景観要素は、校歌によく現れる景観要素である。しかしこれらの景観要素は比喩的、観念的に用いられることが多く、単独で用いられた場合、景観記述に具体性を欠く。山の多い山形では、天空系の景観要素は出現頻度の高い固有名詞系の山とセットで謳われており、校歌の持つ観念性と風土を謳う具体性が相乗して、お互いのイメージを鮮やかに引き立たせている（別表1　景観要素抽出一覧表、別表2参照）。

a．空

景観要素の特性として空は、宇宙の果てまで広がる世界、若者が羽ばたく広い空間、自由やあこがれ、未来などを象徴している。清澄感イメージが高く、比較的独立性の高い景観要素として謳われている。山形では、空の様相として「夜明けの空」、「夕空」、「青空」、「秋空」が多く出現する。場所性も現れており、例えば、市の中央部、霞城公園を校区に持つ第七小では、「山脈めぐる青い空……」の様にいかにも盆地の中心から見た情景描写となる。他に「盃湖にうつる空と山……」（蔵王二中）のように身近な水辺風景と複合させて謳い込んでいるところもある。

b．雲

雲も山とセットになって謳われている。「雲わけそそる龍山の……」（滝山小）の水墨画的情景や「夏は真昼の雲白く　仰ぐ雁戸の雄々しさに……」（第十小）の牧歌的情景のように、雲は山をひきたたせる従属的な景観要素として扱われているケースが多い。雲は山の不動性に対置する動の景観要素である。このほか雲の様相として「朝雲」、「東雲」、「秋雲」、「茜色の雲」等が現れている。

c．太陽・光・月・星

出現頻度が高い太陽（10校）や光（11校）は真理や真実、輝き、暖かさ、平和等を象徴する言葉としてかなり観念的に使われている。景観記述としては「丘に輝く光」（宝珠山・山寺小）、「陽光のさす出羽の山々」（第四中）など、山などの環境要素を引き立てる修飾語の役割にとどまっている。月（13校）は前述したように単独では用いられておらず、月山が代役を演じているようである。星については願いをこめる対象として「未来の星」（第二小）、「夜明けの空の星」（第六小）が謳われているが、出現頻度は4校と少ない。

写真2　残雪をいただく月山

d．虹

夢を象徴する景観要素である虹は5校出現しているが、実際に虹を見る機会の多い山形では、観念の虹ではなく、「街ぞら高い虹」（第六小）の様にそれぞれが、場所的、具体的な景観喚起力を持って記述されている。

e．雪

雪は北国とあって、10校と出現頻度の比較的高い景観要素（少ないような気もするが）となっている。描写内容として「ふぶきのみち……」（西小）、「野はしんしんの雪明かり……」（金井小）、「しんしんと雪降り積めば……」（第八中）などの厳しい冬の情景を謳ったものと、「雪解けて流れる須川……」（西山形小）、「残雪光る山仰ぎ……」（第三中）のように早春の雪解けの水、および「月山の雪……」（第五小）、「残雪光る山……」（第三中）などの山の雪を謳った3つのタイプに分けられる。

f．風

風は出現頻度が21校と天空・気象のカテゴリーの中では一番高い。「吹きいれよ世界の風」（第二中）の様に抽象的な描写もあるが、「小鳥は風に舞いうたう……」（第一小）、「いちょうの若葉風にそよぐ……」（第四小）、「風かおる学びや……」（第十中）のように風は

多くの場合、動物や植物、校舎等とセットとなって用いられ、風景描写や心象イメージ描写に律動感を作り出している。しかし風そのものが地域性を表している記述は見られない。

⑸ 川・水辺の風景

川は大地をきざむ千変万化の水の流れである。その自然の織りなすドラマに、人々は悠久性や循環性など何かエッセンシャルなものを感じとる。また川は古い時代より、水田稲作、舟運、漁など人間の暮らしと密接な関係があり、またかつて子供たちにとって、川や水辺は魅力的な遊びの空間であった。このような川の持つ象徴性や生活との密着性ために、川は校歌で謳われることが多い。

山形市の校歌に謳われている川や水辺の出現頻度は学校数で27(51%)、アイテム数で17、総数で29、出現率は55%である。これらのアイテムのうち固有名詞の景観要素が11、固有名詞で記述はされていないが、校区と歌詞の文脈で名前がわかる景観要素が2、計13となっている（表4および図4参照)。

出現頻度の多い川は、馬見ケ崎水系の川で本流で5校、上流の東沢、下流の白川を含めると7校で謳われている。次いで立谷川（4校)、高瀬川（3校）と北部地域の出現頻度が高い。沿岸出現率(出現校／沿岸校)で見ると、馬見ケ崎川は河川沿岸は出現率は54%(7／13)、立谷、高瀬の両河川では100%（8／8）となっている。そして市内で一番大きな河川、市域を貫流する須川は、西山形小1校にしか現れておらず、沿岸出現率は5%(1／21)とその値は極めて低い。やはり酸性度が強く魚の住まない川は、たとい川の視覚的様相はよくとも校歌のイメージにそぐわないものなのであろう。

興味深いことは、市域外の最上川が2校（高瀬小・金井中）で謳われていることである。最上川は山形の母なる川としてイメージ喚起力の強い川である。この2校の校歌は、いずれもまだ川と人々の生活とのかかわりが深かった戦前および戦後初期の古い年代に制定されたもので、最上川は学校区や市域をこえたスケールの大きい広域的な地域空間の中で認識されている。

表4　川水辺の出現頻度

馬見ケ崎川	6	龍山川	1	雪解けの水	1
立谷川	4	ひがしさわ	1	北の山川	1
高瀬川	3	白川	1	湖	1
最上川	2	濠の水	1	泉	1
盃湖	2	清らかな水	1		
須川	1	蔵王の水	1		

出現校の分布や歌詞の内容を見ると、全般的に東部山麓地域や北部田園地域では川や水辺のイメージが豊かであり、須川以西の西部山麓地域や南部市街地では水辺イメージに乏しいことが認められる。

a．馬見ケ崎水系の川

馬見ケ崎川は水源を蔵王の連山に発し、東沢の渓流として沢水を集め、扇状地にでて馬見ケ崎川となり、都心市街地の北部を蛇行して高瀬川と合流し、白川と名称を変えて須川に流入する。山形市はこの河川が搬出した砂礫の堆積によって出来た馬見ケ崎扇状地の上に立地している。

馬見ケ崎川は、川幅は広いが蔵王ダムと上流の取水堰で水をとられるので水量は少なく、渇水期の中流域では流れの全くない水無川の様相を呈する。では、馬見ケ崎川は校歌でどのように謳われているのであろうか。上流から順に歌詞を調べてみる。

「ひがしざわ　ひがしざわ　水はあい色
学びやの……」　（東沢小・上流）
「雲うつす　流れのほとり肩くんで……」
（第一中・上流）
「みずきよらかに馬見ケ崎　わかくさもえる
きしちかく……」　（第八小・両岸）
「馬見ケ崎　めぐる岸辺の　空のように……」
（鈴川小・右岸）
「蔵王の山の水きよく　きらめきそそぐ
馬見ケ崎……」　（第九小・左岸）
「若葉の校庭に　泉は湧いて　力あふるる若き生命を　馬見のほとりにうたう嬉しさ……」
（第四中・右岸）
「白川よ　水きよらかに日に映えて……」
（第七中・両岸）

内容的には、水の清らかさや岸辺ののどかな風景が描写されているが、これらの歌詞からは、水量感は感

じられない。四中の「泉湧く」という歌詞からは、伏流水や地下水の存在がイメージされる。

ところで川が校歌に出現しない沿岸校は、第三小、第四小、東小、千歳小、大郷小、第五中の中流域左岸の6校である。山形市の顔となるべき河川であるのに出現率が低いのはどうしてなのだろうか。馬見ケ崎川はこのあたりから水量が激減するが、やはり水のない川は親しみにくく、したがって地域のシンボルとして意識されなかったのであろう。

b．立谷川・高瀬川

立谷川は面白山に源流を発し、谷間の山寺地区を貫流し、扇状地に出て市北部のエッジ（市境）となり須川に注ぐ河川で、その沿岸校の山寺小、山寺中、出羽小、明治小の4校で謳われている。高瀬川はその立谷川の南を流れる川で、高瀬地区、楯山地区を貫流し馬見ケ崎川と合流し白川となる。出現校は、高瀬小、楯山小、高瀬中の3校である。

両河川とも水量はそれほど豊富とはいえないが、一定の川幅があり、土手や河川敷は野性的な自然河川の様相を呈している。出現率がパーフェクト（100%）と高いのは、川が一定のスケールと川らしい風貌を持っていること、そして何よりも、これらの川が水田や養魚など地域の生活と密着していたためであろう。

c．逆川

逆川（さかさがわ）は低地の小河川である。須川が逆流して出来たといわれ、また農業用水の排水路とし

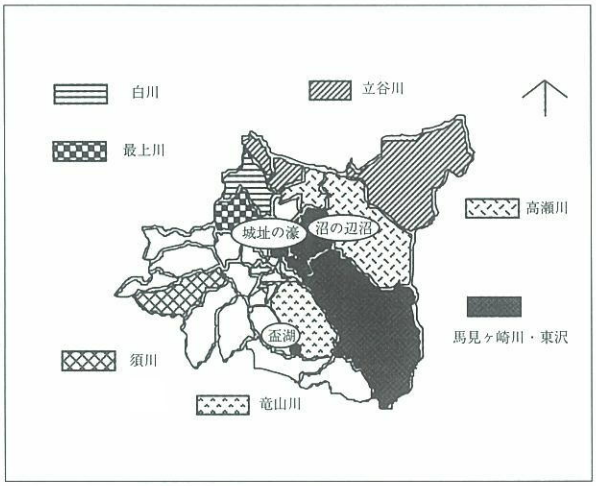

図4　校歌に出現する川・水辺

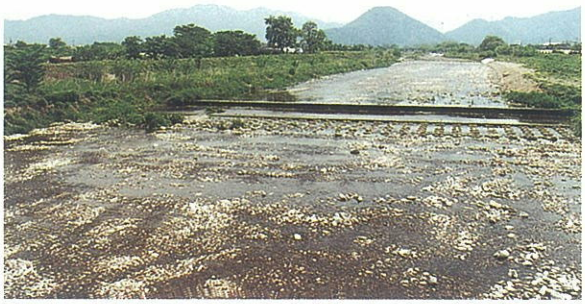

写真3　自然河川の趣を残す高瀬川

ても利用されていた川のようである。固有名詞はでてこないが、山形の水郷というべき市北の水田地帯に校区を持つ大郷小で謳われている。

d．龍山川

龍山川は、龍山の谷を削って西蔵王山麓を流下し、須川に注ぐ渓流河川で、上流ではいわなどの魚影も濃い。龍山川は上流域の滝山小でしっかり謳われている。しかし下流地区の校歌（南小、桜田小、第六中）には川や水辺は出てこない。この地域には小さな沢から流下する零細な河川がいく筋も見られるが、直立護岸化や暗渠化された河川が多く、川が市民に親しみやすい姿となっていない。水辺過疎地域と言うべきエリアである。

e．西山麓の川・水辺

西山麓の校歌には、1つの例外をのぞいて川や水辺は登場していない。その理由は、西山麓の川は川幅のある大きな川はなく、扇状地のため河川の流路勾配が急で、平時は水量も殆どなく涸れ沢の様相を呈しているため、好ましい地域イメージを喚起する校歌に取り上げる景観要素とならないのだろう。例外とは、西山形小で「雪解けて流れる須川」と謳われている本流の須川である。この地域では、学校にプールが整備される以前は、須川が子供たちがよくいく水泳の場所だったといわれる。須川が校歌に登場するのは、この川がそれなりに親しまれていた時代の名残であろう。

ｆ．湖・沼・泉・濠

湖沼系の景観要素で出現するのは、蔵王地区にある盃湖（蔵王三小・蔵王二中）と鈴川地区にある沼の辺沼（鈴川小）の３校である。「泉」は楯山小、第二小、第二中、第四中の４校に出現する。「泉」は校歌の中では「知識の泉……」の様に観念的に用いられることが多いが、上記４校はいずれも湧水の豊富なところであり、景観記述の中にその場所性が反映されている。

「濠」は霞城公園を校区に持つ第七小に「城址の桜濠の水……」と出現する。しかし霞城公園の濠に接する学校は４校（第一小、第四小、第十小、第二中）あるが、これらの校歌には「城址」も「濠」も見られていない。それぞれの校歌制定当時の霞城公園は地域イメージを高めるメジャーな景観要素ではなかったようだ。

ｇ．校歌から消える川・水辺

昭和40年代以降より、川や水辺が校歌から消えている。昭和40年以降に制定された校歌は、以下の市街地周辺校、第十小(Ｓ42)、第八中(Ｓ47)、南小(Ｓ50)、第九中(Ｓ50)、西小(Ｓ52)、東小(Ｓ56)、宮浦小(Ｓ57)、第十中(Ｓ58)、桜田小(Ｈ４)の９校であるが、これらの校歌から川や水辺に関わる景観要素は出現しない。このことは、新設校の立地特性、作詞者の感性・時代感覚にもよろうが、都市化のため、川や水辺の姿が変わったこと、人々と川のかかわりが希薄になったことなど、この頃から川が思いを託す環境要素ではなくなったことを如実に物語っているのではないだろうか。分布を見ると、市中央部から南部地域にかけてが、先に触れたように、水気の感じられない水辺イメージ過疎地域というべきエリアのようである。

⑹　田野の風景

ａ．丘

校歌に「丘」や「高原」などの詞が見られるのは、やはり起伏に富んだ周縁部の山麓校においてである。例えば西山の山間に立地する双葉小では「奥羽山脈見はらす丘に　学ぶ双葉の子はのびる……」と山間の地域が丘のイメージでとらえられている。校歌に出現する丘や高原には、「蔵王高原」の様な固有名詞がついたものが少ない。その理由として、もともと丘に名称がついていないこと、山に比べて郷土の誇りや衆人が注目する景観対象として意識されることがないためなどが考えられる。

一般に、丘は気軽にアクセスできる見晴らしのよい小高い場所がイメージされる。このため都市の住宅地では丘のつく地名が多い。低地の水田地域に立地する出羽小に「若草萌ゆる右京が丘……」と丘の固有名詞が現れるが、このような低平な地域では、少しでも高くなったところが土地利用上、また景観的にも意味のある場所になっているのだろう（別表１　景観要素抽出一覧表参照）。

ｂ．田野

校歌に現れる田野の風景はおよそ２つの系統のものにわけられる。

その１つは農地や農業生産に関わる「農耕の風景」、もう１つは里の四季の情景をうたった美しい「野辺の風景」である。山形市の校歌では田野の景観要素として抽出した16の要素のうち農耕系のものが８校、野辺の風景系が８校あった。歌詞を紹介すると、農耕系では、以下の大曽根小の校歌がその代表例として挙げられよう。

「雪解けの　畔(くろ)こす水も高なりて　ほのかに土はかおるとき　種蒔く春の幸を胸に……」
（大曽根小）

ここでは、ミレーの「種蒔く人」のような、生産の喜びや土の香りが漂う農耕風景が描かれている。ちなみに作詞者は農民詩人の真壁仁である。

このほかには、「瑞穂の田の面……」（高瀬小）、「みどりの森と田と畑と」（蔵王第一小）、「広々と続く田圃に……」（大郷小）、「土のみのり……」（楯山小）、「肥ゆる土……」（本沢小）、「豊沃の土地……」（千歳小）、「みのりの秋……」（大曽根小）がある。いずれも農作業する人々の姿が目に触れる山麓、田園地域の学校に出現している。

野辺の風景系では、以下のフレーズのようになる。

「春は輝くみちのくの　桃の花咲く野を行けば
におう緑のクローバー……」　（第十小）

ここでは農耕イメージや生活感は消えて、ピクニックにでもいきたくなるような気分で田園風景が美しく抒情的に描かれている。芳賀秀次郎の作詞だが、この詩人の作品には都会的で明るい感じのものが多い。

ほかには、「春は野に敷く　花むしろ……」(第六中)、「花咲く野辺に　啼く小鳥……」(南小)、「緑の森に　かこまれて……」(第八小)、「行こうよ　青い野の果てに……」(金井小)、「風わたる　北国の野……」(第八中) などがある。このような都会派型の野辺の風景は市街地校や市街地に近接した校歌に多く出現している。

c．樹花

樹花の出現率は89%と高率である。種類で最も多いものは桜(9校)で、次いで稲穂(8校)、松(5校)、こま草(3校)、けやき(2校)となっている。ほかに20の種類のバラエティに富んだ樹木や草花が謳われている。

樹花は、近景の環境要素であるが、校舎や校庭、また中景の田野の風景とセットとなって現れることが多い。校庭には桜やシンボルツリーが植樹されているのでこれらの樹木がよくうたわれている。このため、樹花は地域のシンボルとして出現しているのか、学校のシンボルとして出現しているのか、よく調べないと見分けがつきにくい。山形市の樹花として地域性を反映しているものは、出現頻度の高い「桜」や「松」、「稲穂」、「こま草」であろう。

校区スケールの地域のシンボルとなる樹花には「城址の桜」(第七小)、「千歳の松」(第一小・第五中・滝山小・東沢小)、「つつじ」(楯山小・大岡山)、「紅花」(出羽小)、「なでしこ」(高厝中)、「南部草」(第六中)、「クローバー」(第十小)、「はなりんどう」(第九中)、「サクランボ」(第八小) などが挙げられよう。

学校のシンボルツリーと考えられるものに「藤」(第二小)、「銀杏」(第四小)、「アカシア」(第九小)、「ヒマラヤ杉」(蔵王第二小)、「鈴懸」(南沼原小)、「若竹」(南小)、「桜並木」(山寺)、「おおやま桜」(桜田小) などがある。

d．動物

動物は校歌にはあまり登場しない。出現頻度は8、出現率は15%である。動物の種類については鳥がほとんどで、それも「小鳥」、「鳥」などの種類が明示されないものや、椋鳥、鳩などの全国どこにでもいるポピュラーな鳥が登場している。「若鮎」が1校(第三中)あるが、これは川のイメージにダブらせているのであろうか。

写真4　城址公園の桜と濠

(7) 歴史・都市・地域の景観

郷土の風景をうたい込む時には枕詞がよく使われる。その枕詞として「みちのくの……」が5校、「北国の……」が4校、「ふるさとの……」が10校出現している。校歌にうたわれるその「ふるさとの風景」は、これまで取り上げてきたように、山や川、空、田野、樹花など自然が多く、街や村のたたずまいや生活を彷彿させる景観要素の出現は少ない。校歌は何十年もうたい継がれることを前提につくられる。このため不動、不変の景観要素や、そうありたいと願う景観叙述が選ばれる。したがって、歴史的な時間の淘汰を受けない建造物や、うつろいやすい都市の風景は校歌には取り上げられることが少ない。山形市の校歌でも、校舎や歴史的遺構を除くと人為的な景観要素は殆ど出現していない。観光的景観要素として、「湯」・「温泉」が3校(いずれも蔵王地区)現れているが、これは観光資源により街が成り立っている蔵王地区の必然の景観記述といえるだろう。(景観要素抽出一覧表、別表3参照)。

a．歴史

郷土の誇りとして、史跡や遺構、社寺、人物などが校歌にうたわれることが多い。山形市の校歌では以下の6校で歴史的景観要素が出現している。

・城址の桜→霞城公園(第七小)

・城山→長谷堂城（本沢小）
・城あとの緑→中野城（大郷小）
・歴史を刻む岩がね→山寺（山寺中）
・高僧聖→立石寺の高僧・芭蕉など（山寺小）
・千手の訓→千手堂吉祥院（出羽小）

いずれも校区内にある景観要素で、霞城公園を除いて、周縁部の校歌に多く出現しているのが特徴である。都心校で歴史があまりうたわれていないのはちょっと寂しい感じがする。都心地区では史跡や社寺が多くあっても、市民生活との結びつきがいま１つ弱いせいなのかもしれない。

b．学校の風景

学校の景観記述はかなり定型化している。○○学校・△△学園・わが母校のように歌詞の中で連呼され、観念的に記述されるケース（28校）と、校舎・学び・校庭などの具体的な建造物のイメージを伴って記述されるケース（10校）の二通りがある。後者が記述される場合は、「よい眺め　よい校舎」（蔵王第一小）、「高原の風ふきわたる校舎」（大曽根小）など、校舎の立地性がよい場合などに取り上げられることが多いようである。

「校舎の窓」も出現率32％と、出現頻度の高い景観要素である。教室の窓から見える山や、校庭の樹や花がうたわれている。「窓」は学んだ教室や校庭を想起させる景観要素であるが、その景観記述には地域性はそれほど感じられない。この他に、グランド、プールなどの学校施設も登場している。

４．校歌から見た山形市の景観構造と景観特性

これまでの校歌の分析を通して、山形市の景観特性や景観構造の一端を明らかにすることが出来た。要約すると以下となる。

① 山形市の校歌では、山、川、空、田野、樹花などの自然の景観が多くうたわれており、四季の変化や自然に恵まれた地域の景観特性を鮮やかに浮かび上がらせている。

② その中でも山の出現率が極めて高く、山が支配的な景観要素になっている。このためか、天空に対する関心も高く、壮大なドラマを織りなす天体の運行や、変幻自在に変化する気象の様相も、山の描写と併せて豊かに描かきだされている。

③ 山形市のシンボルの山として蔵王連山が中心的な地位を占めるが、月山もその美しい容姿が親しまれており、もう１つのシンボルの山となっている。蔵王が景観的に支配する圏域は、市北部から馬見ケ崎川以南の地域で、月山圏は都心部以北の地域である。

④ 千歳山・白鷹山をはじめとして、山容に特徴があり、かつ歴史的にも由緒のある低山がランドマークとなっている。これらの山は必ずしもその山麓地域だけではなく、山の姿が印象的に見える対岸の地域からも、ランドマークとして親しまれている。

⑤ 須川以東、都心から北部にかけての山麓・田園地域は川や湧水、用水路、沼、池などの水辺資源が比較的豊富な地域である。その中でも立谷川や高瀬川など、住民の生活と密着し、水量の豊かな川のイメージアビリティが高い。馬見ケ崎川の場合、流れが豊かな上流域でのイメージは高く住民に親しまれているが、水量が枯渇する中流域では川に対する住民イメージは低下している。

⑥ 河川勾配がきつい西山麓地域では川とのかかわりは薄い。この地域はため池や用水の環境文化圏と考えられる。

⑦ 昭和40年以降、校歌に川や水辺の景観がうたわれなくなり、川に対する住民意識は大きく低下している。この理由として護岸整備や暗渠化、水質汚濁等により川の様相が変貌したこと、川と生活の結びつきが希薄になったことなどが指摘される。ことに市街化が進んだ都心から南部にかけての市街地は、水辺環境の過疎地といえる。

５．あとがき

校歌には人間を育む最も基本的なものが取り込まれている。そのひとつの柱は友情、理想、真理の探究などの教育理念であり、もう１つの柱は人々が育つふるさとの環境である。このような視点で校歌を改めてと

らえ直すと、住民のイメージの中に形成されているあるべきふるさとの環境像が浮かび上がってくる。この環境像こそ景観整備で論じねばならない重要事項であろう。

山形市の景観を見る住民意識の基底には、土や農耕、労働の喜びを重視した農民派的な地域観と、必ずしも生産にはこだわらない未来へのあこがれや、生活の楽しみを求める都会型の地域観が存在し、それが共存しているように思われる[3)]。これらの校歌がつくられた時から長い年月を経て未だにうたい続けられていることは、それぞれの校歌に共感できるものがあるからだろう。しかし都市や人々の暮らし方は時代とともに動き、変化している。これらの校歌にこめられているメッセージをどのように理解し、地域づくりに活かしていくかが今後の課題である。

この校歌研究でやり残した作業も多いが、ここでは調査研究中に経験した以下のいくつかのエピソードを紹介して、今後の参考としたい。

a．校歌の生命力

市内のある場所の酒席で、店の主人と歓談しているときに話題が山形市の校歌の話になった。すると突然、1つ置いた隣の席に座っていた見知らぬ女性の客が私の母校の校歌はこうですと、その歌詞をくちずさんでくれた。それは「春らんまんの　花かげに……」で始まる三中の校歌だった。そして歌詞は「……残雪光る山を仰ぎ　若い季節のきらめきを　いろどる君の智恵の瞳……」と続いた。

春らんまんの花かげとは、校庭の桜であろうか、霞城公園の桜か、それとも一斉に開花する4月から5月にかけての里の風景なのか。残雪光る山とは、蔵王か月山か、そのイメージはそれぞれの場所のリアルな想像力を伴って果てしなく広がる。山形は歌詞の美しい校歌が多い。山形の校歌が心の琴線に触れるのは、歌詞のイメージ喚起力が優れているということだけでなく、歌詞と実態との乖離がまだ少ないからであろう。山形では、このように母校の校歌に誇りを持ち、その歌詞を忘れず、心の中でうたい続けている人は決して少なくないと思われる。校歌に生命力があるとすれば、その生命力は実際の環境の姿に大きく左右されている。校歌がいきいきとうたい続けられる限り故郷は健在である。

b．校歌の環境保全効果

馬見ケ崎川と高瀬川が合流するその下流は白川という名称の川となる。この白川は第七中の学校区にあり、校歌では「白川よ　水きよらかに　日に映えて……」とうたわれている。ところが近年その川の水が汚れ「水きよらか」な川ではなくなってしまった。そこで校歌にうたわれている川のイメージに戻そうと、川の浄化運動が起こった。この運動は現在、先生、生徒、保護者が一丸となって進められているが、校歌が触発した環境保全効果といえるだろう。

c．景観を取り込む校舎のデザイン

調査の中で出会った校舎のデザインで最も印象深かったのは、大郷小の月山の景観を取り込んだ校舎の配置デザインだった。大郷小のグランドは校舎の北側に配置されており、廊下に立つとそのグランドを通して真正面に月山の美しい容姿が姿を現す。現在は、鉄筋の校舎に建て変わっているが、配置のデザインは木造時代と変わっていない。当時の設計者（明治期であろうか）が、日本の伝統的な借景手法を用いて月山をいかに校舎に取り込むか、その配置設計に意をこらしていただろうことが容易に想像される。そしてその何十年か後に、「あたたかい光あふれた　グランドにみんな集まれ　月山はいつも見ているよ……」という校歌が生まれた。この校舎で学んだ子供たちは、故郷を離れた後にも、この美しい山に見守られた故郷のまちを生涯忘れることはないだろう。

このような景観を取り込む校舎のデザインは、これからの学校建築や公共施設の設計に参考となるものである。そして、学校こそ親しまれる地域のランドマークでありたい。

註

＊1　北原理雄「環境教育媒体としての校歌における景観記述性と地域景観イメージ形成に関する研究」平成4年度科学研究費補助金研究成果報告書。他に例えば、浅見雅子・宮野明彦「地域環境と環境意識について―山梨県内の中学校校歌の分析」日本建築学会東海支部「地域・気候と居住環境」研究報告集第3号（1987）など。

＊2　校歌の制定は、学校の新設時（分離や統合を含む）につくられている。また歌詞の内容が時代にそぐわなくなった場合、新しいものに「改訂」されている。古い校歌は、「創立記念日の歌」として残している学校もある。

＊3　深田久弥は『日本百名山』の中で「同じ東北の山でも、蔵王山には、鳥海や岩手のような独立孤高の姿勢がない群雄並立といった感じで、その群雄を圧してそびえ立つ盟主がない―この長大な尾根は東北人特有の牛のような鈍重さを持って、どっしり根を張っている。」と記している。山形に住む人々は、この山の中にもっと荘厳で霊的なものを感じ続けているのだろう。斎藤茂吉、真壁仁はじめこの蔵王を魂の父として培った文学者は多い。

参考文献

1）『新版山形県大百科事典』、『山形県年鑑1994』、『平凡社現代人名情報事典』
2）坂本俊亮ほか『山形百山』、無明舎
3）真壁仁『みちのく山河行』、法政大学出版局

別表１　景観要素の種類と出現頻度一覧表(山形市小中学校53校の校歌に謳われた景観要素)

景観要素	山	川・水辺	丘	田野	樹花	動物	天空・気象・地域等
内容	蔵王 20 月山 9 龍山 8 千歳山 5 雁戸山 4 白鷹山 3 大岡山 2 葉山 2 宝珠山 2 奥羽山脈 2 めぐる山 2 盃山 1 城山(長谷堂) 1 色ずく山 1 あずまね 1 高い山 1 火の山 1 緑の山 1	馬見ヶ崎川 5 立谷川 4 高瀬川 3 最上川 2 盃湖 2 須川 1 竜山川 1 ひがしさわ 1 白川 1 濠の水 1 逆川 1 清らかな水 1 蔵王の水 1 雪解けの水 1 北の山川 1 湖 1 泉 1	右京ヶ丘 1 緑が丘 1 蔵王の麓 1 桜ヶ丘 1 丘の上 1 水すむ丘 1 山脈見晴らす 高原 1 丘 1	土のみのり 1 みずほの田の面 1 田と畑 1 みちのくの国原 1 肥える土 1 種蒔く春 1 春の野 1 北国の野 1 広々と続く田圃 1 緑の森 1 荒れ地 1 豊沃の土地 1 青い野 1 土のみのり 1 花咲く野辺 1 吹雪の道 1	桜 9 松 5 稲穂 8 こまくさ 3 けやきの若葉 2 サクランボ 1 アカシヤ 1 ヒマラヤ杉 1 鈴懸 1 柳の若葉 1 若竹 1 柳 1 銀杏 1 桃 1 杏の花 1 藤 1 つつじ 1 かきつばた 1 すいれん 1 紅花 1 菜の花 1 南部草 1 花りんどう 1 野辺の花 1 クローバー 1	小鳥 2 鳥 2 椋鳥 1 鳩 1 百舌 1 若鮎 1	【天空　気象】 空 15 太陽 10 光 11 雲 14 月 (13) 星 3 虹 5 雪 10 風 21 89／9 (168) 【地域】 みちのく 5 北国 4 まち 4 村 1 ふるさと 10 校舎・学びや 10 学校 13 母校 13 学園 2 窓 17 歴史 3 その他 6 84／12 (158)
アイテム総数／アイテム数(%)	66／18 (125)	28／17 (53)	8／8 (15)	16／16 (30)	47／25 (89)	8／6 (15)	193／21 (364)
学校数計(%)	50 (94)	25 (47)	8 (15)	16 (30)	36 (68)	8 (15)	―

別表２　景観要素の記述１－天空・気象

景観要素	空	太陽・光	雲	月・星	雪・虹	風
内容	青い理想の空(01) 空をかける(02) 山脈めぐる青い空(07) 秋の澄んだ空(10) 月山と大空(11) 夜明けの空・みちのくの空・夕映えの空(13) 空のようにきよい瞳(14) 高い空(18) 夕べの空(25) 盃湖にうつる空・蔵王の空(29) 蔵王の空(44) 蔵王の夜明けの空(45) 盃湖にうつる空・蔵王の空(52)	【太陽】10／10 いずる日いる日(15) 真実の日の光(16) 世紀を開く日の光(18) 高い山(蔵王)から日が昇る(27) 天津日の光(30) 朝日呼ぶ蔵王(32) 朝日にかおる道(33) めざすは太陽(34) 太陽の子(37) 日にはえる白川(44) 【光】11／11 そそぐ光(01) 光る朝雲(16) あたたかい光(17) 空には光(21) 丘にかがやく光(22) 校舎の窓にうつる光(27) 平和の光(30) うづの光(31) 出羽の山々の陽光(41)雪の清き光(45) 校舎の窓にさす光(52)	月山の雲(01) 龍山の秋雲(06) 夏の真昼の白い雲(01) 葉山に光る朝雲(16) 高い青空(18)・月山・蔵王 雲井(21)・あずまね 茜さす雲(23)・雁戸 雲わけそそる龍山(24) 赤い峰の雲(29)・龍山 動く東雲(30)・蔵王 朝雲(35) 雲移す流れのほとり(38) 希望の雲(1)出羽の山々 赤き峰の雲(52)龍山	【月】(13／13) 月山・13 (月と月山は同体) 【星】 未来の星(02) 夜明けの空の星(06) 夕べの空の星(27) 輝く星(39) またたく星(41)	【雪】 吹雪の道(12) 雪しぶく北の国(39) 野はしんしんの雪明かり(16) しんしんと雪降り積む(45) 雪説けて流れる須川(32) 雪解けの水(35) 月山の雪(05) 残雪光る山(40) 月山の雪かげ(43) 雪かがやいて遠なる山(26) 純粋は蔵王の雪(53) 【虹】 まちそら高い虹(06) 金の虹(08) 未来の遠い虹(10) 虹のように招く未来(14) 未来を開く虹(16)	風と小鳥(01) 風のそよぐいちょうの若葉(04) 風のようににおう野の花(06) 光と風の明るい窓(08) 風にそよぐアカシアの梢(09) 風にそよぐ稲穂(10) 校庭を走る風(11) 真昼の澄んだ風(13) 風の中を進むぼくら(14) 風の中にみがくまこと(16) 緑の風(18) 風にかおる桜並木(22) 若葉をわたる風(25) 青葉が風を踊る道(33) 高原の風(35) 風わたる北国の野(45) 春風わたる峰(26) さわやかにしみる青葉風(38) 吹き入れよ世界の風(39) 松吹く風(42) 風かおる学びや(47)
アイテム総数(%)	17／17 (32)	太陽10／10 (19) 光11／11 (21)	14／14 (26)	5／5 (9)	雪11／11 (21) 虹5／5 (9)	21／21 (40)
学校数計(%)	13 (25)	10 (19) 11 (21)	14 (26)	5 (9)	11 (21) 5 (9)	21 (40)

別表３　景観要素の記述２－地域・都市等

景観要素	地域	まち・ふるさと	校舎・学びや等	窓	歴史	その他
内容	【みちのく】５／５ 春は輝くみちのくの(10) ああみちのくの空はれて(13) 稲穂のそよぐみちのく(26)みちのくの稲穂の上にひるがえる(45) うるわしみちのく(46) 【北国】４／４ 北国の街(10) 北国の花(13) 北国の子われら(37) 北国の野(45)	【ま　ち】４／２ ふるさとのまち(17)(42)(44) 街ぞら高い(06) 【村】１／１ 村を育てし城山(31) 【ふるさと】10／10 ふるさとの山の緑(02) ふるさとの山形第八小学校(08) ふるさとの誇り(49) おこそうよふるさとのまち(17) ふるさとの土の実りの豊かさ(20) ああふるさとは美しきかな(41) ふるさとの街今明けわたる(44) ふるさとのまちいまあけわたる(42) はえあるふるさと(46) 青春のふるさと(47)	【校舎・学びや】10／10 我らの校舎(05) よいながめよい校舎(27) 高原の風吹きわたる校舎(35) 大気すがしき学びや(15) 緑の中のまなびや(20) 胸にきざむまなびや(22) 水のめぐるまなびや(23) 國のもなかのまなびや(47) 丘の上にきぜんと立つまなびや(51) 金にひかりてそびえたつ学びや(53) 学校・13／13 母校・13／13 学園・２／２	むらさきかおる母校の窓(02) 月山をうつす窓(11) 日にはえる窓(15) 明るい教室の窓(17) 花咲く窓辺(24) 田と畑の明るい窓(27) 校舎の窓に移る光(29) 朝日さす学びの窓(34) 希望の窓(35)椋きなく朝の窓(41) 学びの窓(48)校舎の窓に光りさして(52) 光と風の明るい窓(08)心の窓を開く友(09) おおやまざくらにおう窓辺(36) 開け放して心の窓(39) 明るく開いた窓々(51)	城址のさくら(霞城公園)(07) 城あとのみどり(中野城)(17) 高僧聖(山寺)(22) 歴史をきざむ岩がね(山寺)(50) 千手観音(19) 城山(長谷堂城)(31)	湯・温泉(27)(29)(52) 山の樹氷(16) 旗(06)(45) 校章(11) グランド(17) プール(13) ほか
アイテム総数（%）	みちのく５／５(９) 北　　国４／４(８)	まち・むら５／３(９) ふるさと10／10(19)	校舎・まなびや10／10(19) 学校・母校・学園・28／28(53)	17／17(32)	６／６(11)	20／20(38)
学校数計（%）	6(11)	12(23)	38(72)	17(32)	6(11)	20(38)